

北海道遺産の教材活用の可能性とその意義-小学校・中学校における社会科と道徳教材として-

著者	菊地 達夫
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報
巻	1
ページ	11-20
発行年	2009
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001148/

北海道遺産の教材活用の可能性とその意義

－小学校・中学校における社会科と道徳教材として－

菊 地 達 夫（北翔大学短期大学部・北翔大学北方圏学術情報センター）

抄 録

2000年以降、北海道遺産を含む各種遺産の選定や指定が盛んとなっている。2006年、改正教育基本法が成立し、「伝統と文化を尊重」が重視され、2008年の新学習指導要領（小学校・中学校）の告示では、伝統・文化に関する学習の導入が指摘された。こうした動向から、遺産を教材活用できる可能性が以前よりも増した。

そこで、本研究では、北海道遺産を小学校及び中学校における社会科と道徳教材として活用できる可能性とその意義について検討する。

研究方法として、まず、北海道遺産の特色を浮き彫りとし、改正教育基本法と新学習指導要領の改訂ポイントから、どのような場面で教材活用の可能性があるのか明らかとする。それをふまえ、小学校及び中学校の社会科と道徳の指導計画案を例示する。最後に、北海道遺産を教材活用する意義について若干の考察をする。

その結果、北海道における遺産の関心は、2005年の世界自然遺産「知床」の登録がきっかけになったと考えられる。北海道遺産の選定は、地域内での生起が唯一の条件であり、多様な遺産の広がりにつながった。

教育業界では、2006年の改正教育基本法において、「伝統と文化を尊重」が明文化され、新学習指導要領の中で重要な改善ポイントになった。その一つとして、遺産の教材活用は注目された。小学校では、中学年における地域調べ学習の教材、中学校では、身近な地域の歴史を調べる教材として適することがわかった。また、道徳では、遺産を保存・保全してきた過程から、価値認識に役立つことが考えられた。指導計画案として、小学校では、「上ノ国の中世の館」を、中学校では、「札幌苗場地区の工場・記念館群」を取り上げ、社会科の単元理解を経て、道徳につなげる展開を例示した。

北海道遺産は、身近な地域に根ざす事象といった他に、人々の思いや願いを含む「北海道らしさ」も重視されたものである。この「北海道らしさ」は、いわゆるふるさと学習の基礎となるものである。ふるさと学習は、「伝統と文化を尊重」に深く関連する。このようなことから、北海道遺産は社会科と道徳の中で活用することにより優れた教材に成り得る。

キーワード：北海道遺産・改正教育基本法・新学習指導要領・社会科・道徳

I. 問 題

1. 問題の提起

近年、日本各地では、地域に根付く資源を保存活用する動きが活発化している。北海道でも、世界自然遺産¹⁾、伝統的建造物群²⁾、重要文化財³⁾、産業遺産⁴⁾、土木遺産⁵⁾、地質遺産⁶⁾、戦争遺産⁷⁾など保存または保存を目指す動きが続いている。こうした遺産は、概ね、古くて貴重な資源であるといった共通性がある。北海道は、明治期以降、急速な開拓を押し進めた結果、日本各地の中で

もっとも残存する遺産が少ない地域と考えられてきた。しかしながら、北海道も、明治期から100年以上を経たのに加え、それ以前から根付くアイヌ文化の価値も高く、多様な遺産の存在・価値が認識されるようになってきた。さらに、北海道では、地域限定遺産として「北海道遺産」の選定を行っている。そのいくつかは、他の指定遺産と重複している場合もある。

北海道における遺産への関心は、2005年、世界自然遺産の登録となった「知床」の影響が大きい。「知床」は、北海道内で初めての世界遺産登録地となった。また、2007年、函館市の著保内野遺跡で出土した土偶が、国宝に指定されている⁸⁾。この土偶も、北海道では初め

ての国宝の指定であった。それに続き、2008年、文化庁は、「北海道・北東北の縄文遺跡群」を世界遺産候補に追加した⁹⁾。これにより、北海道と青森県は、自然遺産と文化遺産の世界遺産登録地の可能性も出てきた。現在のところ、都道府県単位で、両遺産の登録地はない。

一方、日本人の遺産に対する価値認識が欠落している事例が注目された。2008年、世界遺産のイタリアのサンタ・マリア・デル・フォーレ大聖堂に日本の短期大学生が、落書きをしたとの報道があった¹⁰⁾。とりわけ、海外研修の教育活動中の出来事であったこともあり、大きな関心を招いた。報道後、学生の1人は、「歴史を理解していなかった」とコメントしている。しかしながら、歴史認識はもちろんであるが、遺産登録された価値の意味を理解していなかったことが大きい。遺産や文化財への落書きは、今に始まったばかりではなく、国内の重要文化財でもあり、破損や破壊といった事例がたびたび生じている¹¹⁾。

2006年、改正教育基本法は、遺産の教材活用に向けて大きな影響を与えた。改正法の第2条教育の目標では、

（前略）伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うとなっている。改正法をふまえ、北海道教育委員会でも、「ふるさと学習の充実」を具体化した。さらに、小学校・中学校の学習指導要領総則（教育課程編成の一般方針）では、「道徳教育は、（中略）伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し（中略）道徳性を養うことを目標とする」という内容に修正された。「郷土を愛する」では、遺産を道徳の教材活用として取り上げることができる。また、後で述べるように、社会科では、これまで以上に北海道遺産の活用を期待できるようになった。今回、複合的な教材活用の事例として、社会科と道徳を取り上げるが、他の教科・領域にも活用の可能性が広がっている。例えば、小学校音楽科では、国歌斉唱を「歌えるよう指導」に修正し、小学校国語科では、扱う教材として「昔話や神話・伝承」というように改めた¹²⁾。こうしたように、全教科等を通じて、伝統と文化を尊重に力を入れるような方向になっている。

以上から、北海道遺産をはじめとした各種遺産の選定や指定の増加、改正教育基本法の成立、新学習指導要領の告示をふまえての「伝統と文化を尊重」と道徳教育の充実といった動きが、近年みられた。そのため、学校教育において、北海道遺産を活用することで高い学習効果を得られるのではないかと考えた。

2. 問題の所在

本稿は、北海道遺産を複合的に教材活用する可能性を

探り、その意義を明らかにしようとするものである。具体的には、義務教育機関の社会科と道徳の内容として、活用に適する可能性を検討しつつ、その意義に迫ろうとするものである。社会科では、地域学習や歴史学習の教材、道徳では、価値を伝える教材の活用を想定できる。

遺産の保存活用に関する先行研究は、観光利用の効果を検討したものが多い¹³⁾。観光利用の効果では、遺産そのものを対象とする場合、遺産を核としながら地域活性化につなげようとする場合に大別できる。とりわけ、世界遺産のような保存価値が高いと判断されたものは、恰好の観光資源となりやすい。他方、観光公害を招いたり、入り込み数が一過性の現象であったりと、マイナス面が浮き彫りとなる事例やプラス面の経済的効果が持続しない事例も報告されている。

筆者は、これまで伝統的建造物群の保存活用に関して観光利用と教育的利用の双方に関心をもってきた。とりわけ、観光利用でも、遺産（資源）のもつ教育的価値（情報）が正しく認識されるべきであるとの立場をとってきた。

伝統的建造物群を含む遺産の教育的活用では、学校教育と社会教育（生涯学習）に区分できる。学校教育では、社会科、地理歴史科の内容を理解する上で、有力な教材となる。ただ、そのアプローチは、ある特定の教科等の単元理解する上で、遺産を活用し、効果を高めようとするものが多い。菊地（2003）では、江差町の地域資源の活用実態を調査した際、姥神大神宮祭と江差追分（北海道遺産選定）を小学校と中学校の総合的な学習の時間において実践していることを報告している。小学校では、姥神大神宮祭と他地域の祭との違いを調べ学習で行い、中学校では、江差追分に関する講話を行っていた。いずれも、教科等の課題目標を達成するまでの一つの学習活動に過ぎない。

そうした中で、小関（2007）の成果は、示唆に富む。小関（2007）では、高等学校の地理教育と価値教育を融合する教材として、世界遺産の活用を取り上げ検討した。価値教育は、主として道徳の時間、総合的な学習の時間、HRで行う。他方、社会科の目標には、価値教育で目指すものを含んでいる。そのため、世界遺産を活用することで双方の教育目標を達することができると考え、実践を試みた。小関（2007）の成果は、教科単元の理解に価値教育を含みつつ、一つの教材（世界遺産）を通して、実践した点にこれまでとの違いがある。

本稿で取り上げる北海道遺産の場合、寺本・田山（2007）において、教材活用の可能性を指摘している。寺本・田山（2007）では、北海道遺産の教材化として、可能性があるものを24件挙げた。社会科の教材活用を示したものであるが、「路面電車」や「北海道のラーメン」

等どのように教材活用するのか、期待を抱かせるものもある。残念ながら、24件の教材化の指導計画案については、詳細に示されていない。

3. 研究の目的

本稿では、北海道遺産の特色を示した上で、新学習指導要領の社会科と道徳の改訂ポイントを取り上げながら、遺産の教材活用の可能性について検討する。それをふまえ、小学校・中学校における社会科と道徳の指導計画案を提示する。その結果、遺産の教材活用の有効性や意義を示したい。

Ⅱ. 研究 方 法

1. 北海道遺産の特色

北海道遺産については、まず、これまでの選定に至るまでの過程とその条件について述べる。次に、支庁別における遺産の分布を整理し、地理的な広がりの特徴を確認する。続いて、遺産の種類について、自然的なもの、人文・社会的なもの、複合的なもの及び時代区分の面から若干の傾向に触れる。それらをふまえ、他の文化財との選定や指定と比べ、どのような違いがあり、また特色を有するのか、明らかとする。

2. 教材活用の可能性

改正教育基本法の「伝統と文化を尊重」は、社会科や道徳において、どのように取り入れられようとしている

か、新学習指導要領の改訂ポイントを中心に検討する。その上で、どのような遺産を、どのような場面で教材活用できるのか、その可能性を示す。続いて、北海道遺産を用いた小学校及び中学校における社会科と道徳の指導計画案を具体化する。

3. 教材活用の意義

以上の結果をふまえ、北海道遺産は、社会科や道徳の教材として複合的に活用することで、どのような有効性をもつのか、若干の考察をし、結びとしたい。

Ⅲ. 教材活用に関する検討の結果

1. 北海道遺産の特色

現在、北海道遺産は、52件ある。北海道遺産は、次世代に引き継ぎたい北海道の大切な資源として、自然、文化、歴史、生活、産業など幅広いものを対象としている。選定は、全国からの応募を行い、北海道遺産選定専門委員会によって行われている。2001年10月、第1回は約16,000件の応募の中より25件、2004年10月、第2回は約9,000件の応募の中より27件を選定した。選定基準は、学術的、美的な価値などの「客観的な評価基準」に加え、保存や活用の取り組みなどの「思い入れ価値」さらに「北海道らしさ」を含んでいる。

北海道遺産の場合、その活用も視野に入れすすめている。北海道遺産構想では、選定遺産を活用しながら、地域の活性や魅力を高め、新しい創造運動につながるこ

第1表 北海道遺産の名称と地域（2008年現在）

遺産名	地域	遺産名	地域
稚内港北防波堤ドーム	稚内市	福山（松前）城と寺町	松前町
宗谷丘陵の周水河地形	稚内市	五稜郭と箱館戦争の遺構	函館市他
天塩川	天塩町他12市町村	函館山と砲台跡	函館市
留萌のニシン街道	留萌市他	函館西部地区の街並み	函館市
増毛の伝統的建造物群	増毛町	路面電車	函館市・札幌市
旭橋	旭川市	静内二十間道路の桜並木	新ひだか町
土の博物館	上富良野町	モール温泉	音更町他
雨竜沼湿原	雨竜町	らわんブキ	足寄町
北海幹線用水路	赤平市他	旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群	上士幌町
空知の炭鉱関連施設と生活文化	夕張市他	霧多布湿原	浜中町
石狩川	石狩市他	摩周湖	弟子屈町
江別のれんが	江別市	根釧台地の格子状防風林	中標津町他
北海道大学 札幌農学校第2農場	札幌市	野付半島と打瀬船	別海町・標津町
開拓使時代の洋風建築	札幌市	ワッカ・小清水原生花園	小清水町他
札幌苗穂地区の工場・記念館群	札幌市	ピアソン記念館	北見市
小樽みなとと防波堤	小樽市	森林鉄道蒸気機関車「雨宮21号」	丸瀬布町
ニッカウスキー余市蒸留所	余市町	オホーツク沿岸の古代遺跡群	網走市他
積丹半島と神威岬	積丹町他	流水とガリンコ号	紋別市他
京極のふきだし湧水	京極町	屯田兵村と兵屋	北海道全域
スキーとニセコ地域	倶知安町	北海道の馬文化	北海道全域
北限のブナ林	黒松内町	アイヌ語地名	北海道全域
昭和新年国際雪合戦大会	壮瞥町	アイヌ模様	北海道全域
登別温泉地獄谷	登別市	アイヌ口承文芸	北海道全域
内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群	函館市他	サケの文化	北海道全域
姥神大神宮渡御祭と江差追分	江差町	北海道のラーメン	北海道全域
上ノ国の中世の館	上ノ国町	ジンギスカン	北海道全域

資料）北海道遺産構想推進協議会事務局発行リーフレット。

第2表 支庁別の北海道遺産の選定数

支庁名	遺産数
石狩支庁	6
後志支庁	6
空知支庁	4
胆振支庁	3
日高支庁	1
渡島支庁	6
檜山支庁	3
上川支庁	4
留萌支庁	3
宗谷支庁	2
網走支庁	6
十勝支庁	3
釧路支庁	3
根室支庁	2

資料) 北海道遺産構想推進協議会事務局発行
リーフレット。

注1) 複数の支庁に含む遺産は、それぞれの支
庁に加算。

注2) 北海道全域に含む遺産は、除外。

を目指している。具体的には、3点挙げている⁹⁾。1つは、地域の宝物を掘り起こし、育成・活用する過程で地域づくりや人づくりを展開すること、2つは、自分が暮らすまちや地域への愛着と誇りを醸成すること、3つは、観光の促進をはじめ、地域経済の活性化へとつなげることである。

北海道遺産は、一定の地理的範囲をもつものが44件ある(第1表)。それ以外の遺産(8件)は、特定の地理的範囲をもたない。一定の地理的範囲をもつ遺産は、14支庁すべてに分布する(第2表)。もっとも多く選定された支庁(6件)は、石狩支庁、後志支庁、渡島支庁、網走支庁である。もっとも少ない支庁は、日高支庁の1件である。

遺産の種類は自然的なもの、人文・社会的なもの、複合的なものに大別できる。ただ、対象が広域的や抽象的なものがあり、明確な区分をしにくい遺産もあるが、人文・社会的なものが多いと考えられる。また、時代区分の場合、明治期以前の場合は、アイヌ文化関連の4点と縄文遺跡関連のものに限られる。大半は、自然的なもの、無形なものを除き、近代化遺産又は現存する構造物となっている。中には、「昭和新山国際雪合戦大会(1989年)」のような近年に芽生えた遺産もある。また、「北海道のラーメン」や「ジンギスカン」といった食品も含まれている。

以上から、北海道遺産は、内容の種類、地理的分布、時代区分等、多様性をもつ。こうした点が、他の指定遺産との違いとなり、大きな特色となっている。例えば、選定の基準が他の文化財と異なる。多くの文化財は、国、都道府県、市町村レベルにおいて種別の条件があ

り、それに応じて指定を受けている。一方、北海道遺産の場合、多様な種類のものが同じ条件で指定を受けている。これに近いものとして、重要伝統的建造物群の指定がある。ただ、多少の用途は混在していても、建造物以外のものが含まれるようなことはほとんどない。また、市域を越えるような広範囲になることも少ない。世界遺産では、広域な県内外を範囲とすることはある。一方、選定や指定の対象物が多岐にわたることは少ない。

すなわち、北海道遺産は、種別、時代、有形無形といった違いに関係なく、北海道内で生起したことが唯一の条件となっている。また、それらの候補となった対象物は、全国各地から応募されたものであり、他地域における一般の人々の思いや願いも含んでいる。それ故、他の指定遺産とは、一線を画し、「郷土愛」を地元住民に加え広範囲な人々から得ている。

2. 新学習指導要領にみる活用の可能性

本節では、新学習指導要領における社会科と道徳の改訂ポイントに着目し、北海道遺産を活用できそうな目標や内容を取り上げ、複合的な活用の可能性についても検討したい。

(1) 社会科の場合

小学校社会科における改善の具体的事項は、以下のとおりである。生活科の学習を踏まえ、児童の発達の段階に応じて、地域社会や我が国の国土、歴史などに対する理解と愛情を深め(下線は筆者、以下同じ)、社会的な見方や考え方を養い、身につけた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して改善を図る(以下、略)となっている。

さらに、地理的内容と歴史的内容に分け、詳細に触れている。歴史的内容では、我が国の歴史や文化を大切にし、日本人としての自覚をもつようにするとともに、持続可能な社会の実現など、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して改善を図る。

(中略) さらに、我が国の国土や地域に関する内容について、環境保全、防災及び伝統や文化、景観、産物などの地域資源の保護・活用などの観点を重視して再構成する、となっている。

中学校社会科における改善の具体的事項は、以下のとおりである。小学校社会科の学習を踏まえ、地理的分野、歴史的分野、公民的分野という3分野の構成は維持しながら、我が国や意味、意義を解釈する学習や事象の特色や事象間の関連を説明する学習などを通して、社会的な見方や考え方を養うことを一層重視して改善を図る。また、様々な伝統や文化、宗教に関する学習を重視

して改善を図るとなっている。

以上から、小学校・中学校の社会科では、地域資源の保護や活用、伝統や文化学習に力点を入れるよう示されている。よって、北海道遺産は、社会科の改善に適する有力な教材と考えられる。以下では、社会科のどのような内容でより適するか、述べる。

社会科教材の活用は、地理的内容（分野）や歴史的内容（分野）が中心となる。小学校では、第3・4学年の目標²⁾の「地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする」が該当する。内容では、「古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子」や「地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事」や「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」が示されている。また、内容の取扱では、「具体的事例」として開発、教育、文化、産業などから選択するように例示されている。例えば、暮らしにかかわる道具では、「北海幹線用水路」、「江別のれんが」、「北海道の馬文化」、暮らしの様子では、「増毛の歴史的建造物群」、「留萌のニシン街道」、「函館西部地区の街並み」、「空知の炭鉱関連施設と生活文化」、「根釧台地の格子状防風林」、文化財では、「福山城と寺町」、「上ノ国の中世の館」、「内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群」、「オホーツク沿岸の古代遺跡群」、「屯田兵村と兵屋」、「北海道大学 札幌農学校第2農場」、「開拓使時代の洋風建築」、「五稜郭と箱館戦争の遺構」、年中行事では、「姥大神宮渡御祭と江差追分」、先人の具体例では、「ピアソン記念館」などが挙げられる。

中学校では、地理的分野の目標として「大小様々な地域から成り立っている日本や世界の諸地域を比較し関連付けて考察し、それらの地域は相互に関係し合っていることや各地域の特色には地方的特殊性と一般的共通性があること、また、それらは諸条件の変化などに伴って変容していることを理解させる」や「地域調査など具体的な活動を通して地理的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に選択、活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる」が該当する。

歴史的分野の目標では、「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる」が該当する。

中学校の場合、地理的・歴史的分野いずれも地域調査での活用を想定でき、すべての北海道遺産を対象にできる。地理的範囲では、北海道全域、支庁単位、市町村単位と広狭に活用できる。また、時代区分では、明治期以

前、明治期、大正期、昭和期と幅広く、長期にわたる地域変化を対象とすることもできる。さらに、種類では、自然、歴史、生活文化、産業など多様であり、地誌的な考察もできる。

一方、小学校の第6学年の歴史的内容は、日本全域を対象としているため、活用には慎重を要する。中学校の歴史分野でも事情は同じである。すなわち、北海道遺産は、地域に対して強い影響を与えたものの、日本全域に対しては深い影響を与えたものが少ない。よって、歴史的内容（分野）の活用は、身近な地域を対象とした地域史を理解する場合に限られる。

(2) 道徳の場合

道徳教材では、小学校・中学校を通じて、「主として自然や崇高なものとかかわりに関すること」と「主として集団や社会とかかわりに関すること」の2つの目標で該当する。

前者の場合、小学校では、第3・4学年の「自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする」、第5・6学年の「自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする」、中学校では、「自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を越えたものに対する畏怖の念を深める」が深く関係する。具体的には、「石狩川」、「天塩川」、「京極のふきだし湧水」、「積丹半島と神威岬」、「雨竜沼湿原」、「宗谷丘陵の周氷河地形」、「北限のブナ林」、「ワッカ・小清水原生花園」、「摩周湖」、「霧多布湿原」の活用が考えられる。

後者の場合、小学校では、第3・4学年の「郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもつ」、第5・6学年の「郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ」、中学校では、「地域社会の一員として自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める」が深く関係する。具体的には、「アイヌ語地名」、「アイヌ模様」、「アイヌ口承文芸」、「サケの文化」といったアイヌ文化の活用が考えられる。

いずれも、遺産を保全・保存する態度の育成から、道徳教材としての活用の意義は高い。各地の指定遺産に対して、ゴミの不法投棄、自然物や文化財の破損や破壊といった行為に対して、「なぜ悪いことなのか」を考えさせることができる。

(3) 社会科と道徳の複合的な活用

すでに述べたように、北海道遺産は、社会科と道徳で同じ教材として活用できる可能性に触れた。道徳は、教科ではないものの、週あたり1時間の時数が割り振られ

ている。また、道徳は、教科や行事を含めた教育活動全体を通じて行うことも示されている。

小学校では、クラス担任制のため、原則、社会科と道徳は同じ教員が担当する。中学校では、教科担任制であるが、道徳はクラス担任が担当する。そのため、社会科教員の場合、担当クラスにおいて社会科と道徳を担当できる。同じ教員が、担当できるならば、社会科の時間で道徳的内容を含めることができるし、社会科と道徳の時間を意図的に関連させることもできる。

新学習指導要領では、小学校・中学校で授業時数が増加するが、教科内容も増えるため、教員裁量の時間が確保されたわけではない。教科内容量が増えたことにより、教材研究に割く時間が必要になる。また、児童生徒の指導はもちろんであるが、保護者、地域の人々、接続学校教員との交流など、校務が少なくなる可能性は低い。こうした点からも、授業を効率的・効果的に展開させる必要がある。

3. 複合的な教材活用の指導計画案

本節では、北海道遺産の活用について小学校社会科(中学年)と道徳、中学校社会科(地理的分野と歴史的分野)と道徳の例示をしたい。また、社会科と道徳の複合的な活用は、社会科の時間での実践を道徳の時間につなげることができるような展開とする。むろん、1つの時間で社会科と道徳を実践する展開もあるが、実際の教

育課程の中には馴染まないものと考えた。小学校と中学校の実践は、いずれも地域調べ学習における教材として、北海道遺産を活用しようとするものである。

1) 小学校における事例

本節では、小学校社会科中学年の地域学習における活用を想定し、「上ノ国の中世の館」を取り上げる(第1図)。また、その学習の延長として、道徳に結びつけた。ここでの活用事例は、北海道南部檜山支庁管内に位置する小学校と仮定する。

以下では、単元名、単元のねらい、指導計画に続き、授業概要について述べる。

まず、52件の北海道遺産の中から、人文的遺産の写真と名称を提示し、古そうなもの4つに絞らせる。その4つとは、「オホーツク沿岸の古代遺跡群」、「内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群」、「福山城と寺町」、「上ノ国の中世の館」を想定している。

続いて、地域の副読本や文化財マップなどを用いて、同じものがないか、探させる。そこで、「上ノ国の中世の館」には、勝山城跡、花沢館跡、洲崎館跡が含まれることを気付かせる。すなわち、地域の文化財が、北海道遺産に選定されていることを理解させる。また、同遺産は、昭和52年、国指定の史跡にもなっている。

中学年では、日本の歴史学習を終えていないので、時代区分の名称は使わず、イラスト図や写真を用いて接近

単元名 ふるさとの大昔の生活の様子を理解し、その工夫や知恵を探る

1 単元のねらい

理 解	地域の文化財を通して、大昔の先人の生活に対する工夫や知恵を探ることができ、地域で生活していた様子を理解することができる。
能 力	地域における大昔の生活の様子について、文化財を手がかりとし、その他の資料も加えながら、まとめ表現することができる。
態 度	地域の文化財について、積極的に活用し、大昔の生活の様子を知ることで、地域への誇りや愛着を深め、文化財を保存していこうとする態度を養う。

2 指導計画(例)

	第1次	第2次	第3次
学習活動・内容	地域における文化財(北海道遺産)を提示し、その中で大昔の生活に関係ありそうなものを考える	文化財や博物館などを直接見学し、資料収集、聞き取り調査などの活動を記録する。また、不思議に思ったことや疑問に思ったことを整理しておく。	疑問などについて各種資料を用いて考える。なぜ、大昔の生活の様子を保存しているか考える。
教師とのかかわり	日本の歴史学習は、終えていないので、時代区分の名称は使わず、イラスト図・文化財の写真などを用いて、大昔の生活の様子に着目できるようにする。	文化財や博物館資料の見学では、見るポイントを予め示し、それらを組み合わせながら生活の様子を理解できるようにする。	単なる事実の羅列にならないようにイラストや写真などを入れ、工夫してまとめることができるようにする。まとめより、なぜ遺産として保存しているか、結びつけることができる。

第1図 小学校社会科と道徳における活用例

することが望ましい。

次は、文化財の直接の見学である。直接の見学では、勝山館跡を中心にすすめる。勝山館跡は、16世紀頃、本州方面で戦国時代と呼ばれた時期に築かれた山城である。築城は、武田信広とされている。築城の時期は、1473年、八幡宮が祀られた時期と考えられている。その目的は、北方日本海岸側の軍事・交易のためと考えられていた。

勝山館跡は、他の2つの館跡に比べ、大規模であり、いくつかの文化財が復元され、見学や思考するのに適している。復元文化財の見学では、分かったこと、不思議に思ったこと、疑問に思ったことを書かせる。また、いくつかの復元文化財を見学することで大昔の生活の様子を想像させ、現代の生活と比較させることもできるであろう。また、隣接する勝山館跡ガイダンス館では、展示資料を通じて、より理解を深めることができる。ここでは、映像やジオラマによって、具体的な大昔の生活の様子を知ることができる。

調査後は、模造紙のようなものに館跡を描き、イラスト・写真を活用しながら、生活の工夫や知恵について、書き記し、大昔の生活の様子をまとめさせる。

最後に、勝山館跡は、なぜ、北海道遺産や史跡に選定・指定されているのか、改めて考えさせる。身近な地域の資源が、北海道や国によって、手厚く守られていることを知り、地域への誇りや愛着に結びつけるようにし

たい。また、他の地域にも、同じような遺産（文化財）を保存しており、地域住民のみに価値が生じるのではなく、北海道民、日本国民に共通財産であることを認識させたい。それを通じて、遺産（文化財）を大事にする態度を育成することができる。

2) 中学校における事例

本節では、中学校社会科における地域調査の活用を想定して、「札幌苗穂地区の工場・記念館群」を取り上げる（第2図）。前節同様、この学習の延長として、道徳に結びつけたい。ここでの活用事例は、札幌市内の中学校と仮定する。

以下では、単元名、単元のねらい、指導計画に続き、授業概要について述べる。

まず、「札幌苗穂地区の工場・記念館群」の写真を提示し、どのような用途の建物群かを考えさせる。北海道遺産には、サッポロビール博物館、北海道鉄道技術館、福山醸造株式会社、雪印乳業資料館の4棟を選定している。

続いて、旧版地形図を配付し、他の地理的事象（例えば鉄道、河川など）を手がかりに、概ねの4棟の場所位置を記入させる。読図をし、4棟付近の自然的事象や社会的事象の特色に気付かせる。例えば、建物の付近には、河川が流れている。また、昭和期の地形図も配付し、比較させながら、どのような地域変化が生じたか注

単元名 ふるさとの文化財を通じて、地域産業の地理的環境や歴史を探ろう

1 単元のねらい

理 解	地域の文化財を通して、地域産業の地理的環境を探り、その変化についても理解することができる。
能 力	地域産業の成立・発展・衰退過程について、文化財を手がかりとし、その他の実物資料や文献資料も加えながら、まとめることができる。
態 度	地域の文化財を見学・観察した上で、地域産業の動向を知り、地域への誇りや愛着を深め、それら文化財を保存・活用していこうとする態度を養う。

2 指導計画（例）

	第1次	第2次	第3次
学習活動・内容	地域における文化財（北海道遺産）を提示し、どのような建造物群かを考えさせる。	文化財や博物館などを直接見学し、資料収集、聞き取り調査などの活動を記録する。また、文化財周辺の地理的環境についても観察させる	文化財の保存・活用する意味について考える。
教師とのかかわり	旧版地形図に文化財の位置を記入し、自然的事象、社会的事象の関係について気付かせる。	文化財や博物館資料の見学を通じて、どのような産業の特色があり、その発展動向にも着目させる。	文化財は、単なる保存のほかに、活用しながら保存する手段があることを気付かせる。

第2図 中学校社会科と道徳における活用例

目させる。例えば、先の4棟の他に、同じような用途の建物がないかどうか、探させる。

次に、4棟の見学と周辺地域を散策し、資料収集、聞き取り調査を行う。そのうちの3棟は、博物館施設であり、多くの地域情報を集めることが可能となる。この情報を手がかりに、どのような発展過程を歩んだかを、まとめることができる。例えば、福山醸造や雪印乳業は、当初、違う場所で創業していた。

最後に、これらの建物は、元々の用途を転用しながら、活用している。なぜ、そのような活用をしているのか、考えさせる。保存は、文字通り、昔のままの姿で維持しているばかりではない。建物を活用すれば、商業施設のように何度も足を運んでもらう来訪で、愛着を持ってもらえる可能性もある。

ここでの地域調査は、地理的分野として、産業群形成の地理的条件と分布の理解、歴史的分野として、その産業群の変容過程の理解、それをふまえ、道徳的分野として多様な保存方法の理解につなげる。とりわけ、普段、利用しているような建物でも、用途を転用し、利活用している古い建物があることを理解させたい。結果、保存活用する態度・行動を育成することにつながる。

IV. 考 察

前章までは、北海道遺産を社会科と道徳の教材として活用する可能性について検討してきた。そこで、本章では、その意義について、若干考察することで結びに替えたい。

1. 小 括

北海道遺産の教材活用に関する着目は、2005年の世界自然遺産の「知床」の登録、改正教育基本法の成立における「伝統と文化を尊重」の明文化、それを受けての新学習指導要領の告示、遺産に対する価値認識の欠落といった事柄が短期間の中で生じたことにある。そこで、北海道遺産は、これらの事柄を効果的に結びつけることができる教材と考えられた。それを明らかにするため、北海道遺産の特色を示した上で、新学習指導要領の改訂ポイントから教材活用の可能性を探り、社会科と道徳の教材として、小学校及び中学校の指導計画案を例示するに至った。とりわけ、指導計画案は、小学校及び中学校における社会科の歴史認識を深めることに続き、道徳的な価値認識についても考えさせようとするものであった。

2. 価値認識学習の意義

北海道遺産は、偶然に残ったわけではなく、人々の手

によって保存や保全をしてきたものが多い。そのような過程を知ることによって、「なぜ、それらを保存や保全しようと思ったのか」理解が深まる。保存や保全をしてきた人々の思いを知ることができれば、遺産に対する価値を認識することができるだろう。これまで、社会科の調べ学習でも、価値認識につなげる可能性はあった。しかしながら、教員が、単元内容の理解を意識するあまり、結びつきを意識することができなかったものと考えられる。こどもへの思考の揺さぶりは、教材をどのように活用するかによって、大きく変わってくる。

3. 伝統文化学習の意義

北海道遺産は、他の文化財とは違い、学術的な価値ばかり評価されたのではなく、「北海道らしさ」といったふるさと学習に関連する部分も含まれた。ふるさと学習は、「伝統と文化を尊重」の基礎になる。よって、北海道遺産は、単なる地域限定遺産の有効活用に留まらず、まさに「伝統と文化を尊重」を理解・思考させる上で最適な教材と成り得る。

加えて、遺産の種類、時代、分布に多様性があり、社会科のいくつかの単元でも活用が期待できる。このような幅広い活用の可能性は、教材活用の意義を高める。

4. 今後の課題

今後の課題として、北海道遺産の教材活用が、児童生徒を通じて、どのような学習効果又は反応を与えるのか、しっかり見極める必要がある。これらについては、機会をみて、事例として紹介した「指導計画案」により実践的な検討をしていきたい。

注

- 1) 世界自然遺産とは、1972年ユネスコ協会で採択された「世界遺産条約」に基づいて登録された自然遺産を指す。国内では、他に「白神山地」と「屋久島」がある。また、登録の種類には、他に「文化遺産」と「複合遺産」がある。
- 2) 1975年文化財保護法改正において「周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いもの」を文化財の種別の1つに加えた。それをきっかけとして、伝統的建造物群保存地区制度が始まった。2007年現在、日本各地に79地区選定されている。北海道では、1989年、港町として函館市元町・末広町が選定されている。
- 3) 文化財保護法では、「文化財」を有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物、文化的景観、伝統的建造物群に分類している。そのうち、有形文化財を重要文化財と呼称している。北海道では、5カ所指

- 定されている（2002年現在）。
- 4) 産業遺産とは、一定の時代において地域に根付いていた産業の姿を伝える遺物や遺跡を指すが、定義として統一されていない。北海道では、空知の炭鉱関連施設（北海道遺産）などが該当する。
 - 5) 土木学会では、各種産業に関係した土木構造物を対象として2000年以降、認定している。建築時期は、概ね戦前までのものとしている。北海道では、2007年、札幌市水道記念館ほか2カ所が認定されている。
 - 6) 地質遺産は、貴重な地形や地層などを含む場所を対象とし、2004年以降、世界ジオパークとして認定を始めた。現在、世界18カ国57地域が認定されているが、日本の認定地はない。その準備段階として、日本ジオパークの認定を始め、山岳、河川、海岸、半島の7地域が対象となった。その中に、アポイ岳と洞爺湖有珠山が含まれる。
 - 7) 戦争遺産とは、昭和期の要塞や旧軍関連施設が主たる対象となるが、大正・明治期、さらにそれ以前のものも対象となる。北海道では、函館山と砲台跡（北海道遺産）や五稜郭と箱館戦争の遺構（北海道遺産）などが含まれる。
 - 8) この土偶は、昭和50年8月24日、函館市尾札部町（旧渡島管内南茅部町字尾札部）で発見され、高さ41.5cm、幅20.1cm、重さ1,745グラムと、現存する中空土偶としては国内最大級の大きさで、頭部の一部と両腕が欠損していたものの、ほぼ完全な形で見つかった。内部は空洞で、頭部から足元まで文様が施され、精巧な作りと写実的な表現から、当時の精神文化を知る学術的価値の高い貴重な資料として、評価されている。
 - 9) 2008年9月27日付北海道新聞記事第16版1頁。
 - 10) 2008年6月25日付北海道新聞記事第16版30頁。
 - 11) 2008年4月20日に長野県善光寺（国宝指定）の本堂に落書きされた。その2日前、善光寺は、聖火リレーの出発地を辞退していた。
 - 12) 2008年3月28日付北海道新聞記事第16版2頁。
 - 13) 第23回日本観光研究学会全国体格学術論文集（2008年）では、遺産・文化財を含んだ論題として7本報告されている。
 - 3) 合田昭二・有本信昭（2004）：『白川郷』ナカニシヤ出版 pp.97-99.
 - 4) 文部科学省（2008）：『小学校学習指導要領解説』総則編，pp.1-3.
 - 5) 文部科学省（2008）：『中学校学習指導要領解説』総則編，pp.1-4.
 - 6) 寺本潔・田山修二（2007）：『近代の歴史遺産を活かした小学校社会科授業』明治図書，pp.49-50.
 - 7) 浅井学園大学生涯学習研究所編（2006）：伝統的建造物群の観光活用とその楽しみ方－望ましい保存活用をめざして－，『学習社会の振る舞いと研究（1）』二瓶社，pp.31-41.
 - 8) 菊地達夫（2003）：学校教育機関における地域資源の活用実態－北海道江差町を事例として－，北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要『生涯学習研究と実践』第4号，pp.135-146.
 - 9) 小関勇次（2007）：世界遺産を教育資源とした価値教育の試み，『全国地理教育学会全国大会発表要旨集』第1号，p.10.
 - 10) 文部科学省（2008）：『小学校学習指導要領解説』社会編，pp.18-99.
 - 11) 文部科学省（2008）：『中学校学習指導要領解説』社会編，pp.19-91.
 - 12) 上ノ国町教育委員会（2008）：『史跡上ノ国勝山館跡』.

引用文献

- 1) 北海道遺産構想推進協議会事務局（2004）：『北海道遺産』.
- 2) 北海道遺産構想推進協議会（2008）：『北海道遺産』，<http://www.hokkaidoisans.org/about/>，pp.1-2.

As Possibility of Teaching Materials Inflection of Hokkaido Inheritance and Social Studies in the Significance : Elementary School / Junior High School and the Morality Teaching Materials

Tatsuo KIKUCHI Hokusho College Hokusho University Northern Regions Academic Information Center

Abstract

After 2000, the choice and appointment of various inheritances including Hokkaido inheritance become prosperous. In 2006, the revised Fundamental Law of Education was concluded, and "respect was made much of by tradition and culture", and introduction of learning to relate to tradition / culture by notification of a course of study (an elementary school / a junior high school) newly of 2008 was included.

Possibility to cut an inheritance by teaching materials practical use from such a trend rose than before.

A study method is as follows. I describe a characteristic of Hokkaido inheritance first. I show what kind of contents I cut it by teaching materials practical use in next from the revised Fundamental Law of Education and revision point of a new course of study. I exemplify social studies and guidance schedule of morality. I consider the significance that the teaching materials apply Hokkaido inheritance in last.

As a result, it is thought that registration of world natural heritage "Shiretoko" of 2005 was a chance as for the interest of an inheritance in Hokkaido. Occurrence in areas was an only condition, and the choice of Hokkaido inheritance led to an expanse of various inheritances.

In the revised Fundamental Law of Education of 2006, "respect was stipulated by tradition and culture", and it was it in a new course of study education throughout the trade at important improvement point. As the one, the teaching materials inflection of an inheritance attracted attention. In an elementary school, I understood that I was suitable as the teaching materials which examined the imminent local history in the teaching materials of local investigation learning in the third and fourth grades of elementary school, a junior high school. In addition, helping value recognition from the process when I stored an inheritance for morality and kept it in good condition was thought about. With "A castle of the Middle Ages of Kaminokuni", I took up "a group of factory / memorials of Naebo, Sapporo district" in a junior high school, and, as guidance schedule, passed by unit understanding of social studies in an elementary school and exemplified development to be able to tie to morality.

As for Hokkaido inheritance, it was made much of thought of people and "a quality of including a wish Hokkaido" by the choice unless I said a phenomenon to come from an imminent area. This "quality of Hokkaido" becomes so-called oldness and the basics of learning. Oldness and learning are related to "respect by tradition and culture" deeply. From such a thing; of social studies and morality; when inflect, Hokkaido inheritance can become the superior teaching materials.

Keyword : Hokkaido inheritance, The Revised Fundamental Law of Education,
New Course of Study ,Social studies, Morality